

映画評

一般

『ニーチェの馬』

井上静夫 同人誌主宰

2012年 仏・独・スイス・ハンガリー合作

監督 タル・ベーラ 154分

もしかしたらとんでもない映画に立ち会ったのかもしれない。そう思わせる映画だった。タル・ベーラ監督の最後の作品、映画史にも残る映画となるかもしれないこの映画を7年前、リアルタイムで観られたことに感謝せずにはいられなかった。

映画は、暴風が吹き荒ぶ中、男が馬車でひたすら進むシーンから始まる。馬車が荒野を歩み続ける。バックには重厚で単調な音楽。いきなりこれがワンカットで約5分間映し出される。そして、これがこの映画を象徴するシーンであることが後にわかる。

あえてこの映画の物語を述べるならば、トリノの田舎のどこかで1889年1月3日から始まる暴風が吹き荒れる5

日間の出来事を描いたものである。主要な登場人物は2人。馬車の仕事をする父と家事をする娘。石造りの粗末な家とふたりの命を繋ぐ古井戸、それに疲れ果てた馬。暮らしぶりは貧しく、助ける者もない。

物語のほとんどは極端に単調な生活を繰り返すだけである。朝起きる。娘が井戸に水を汲みに行く。父親の身支度を娘が手伝う。朝食にジャガイモを1個食べる。窓から外を眺める。夜父親の着替えを手伝う。寝る。これだけの映像が淡々と繰り返されるのである。セリフは極限まで省略され、ふたりの会話も必要最小限なことばのみである。そもそも、映画が始まってから、娘が父親に「食事よ」というだけのセリフに到るまで約20分もかかっている。

タイトルから想像されるように、「神は死んだ」というニーチェ思想に端を発する映画であるともいわれている。ニーチェの思想のメタファーがそこにあるように思われる。例えばこの父娘はニーチェ思想の体現者のようにもみえる。父親の右腕が不自由なのは不完全な人間をあらわすのか、人間に降りかかる様々な苦難の象徴なのか。ふたりは、反キリスト教らしく部屋には十字架もなく、朝の食事にお祈りもしない。3日目にアメリカに行こうとする流れ者を追い払うシ

ーンなどは、深読みすれば現在のハリウッド映画への異議申し立てのようにも思える。もともと、タル・ベーラの映画はハリウッド映画と対極に位置する映画であるからだ。

しかし、こんなふうには分析することはこの映画を語るひとつの要素にすぎないように思えてならない。なぜなら、あまりにも映像の力が強いからだ。あまりにも圧倒的な映像美に裏打ちされているからだ。映像に圧倒され、映像に打ちのめされる。モノクロームの陰影の深く、ざらついた画面。フィルム粒子ひと粒ひと粒が浮き立つ、彫りの深い質感。永遠に消えることのない異物感とでもいうようなものが胸の奥底に沈殿する。これは物質としての映画なのだ。映画という物質を観ているのだ。そしてそのことによって、映像というものが映画の原点だということを感じ知らされるのである。カメラはときに寄せ、ときに引き、ローアングルで、そして回り込んで撮る。対象を見据えるようにじつと捉えて放さない。ずしりと重いロングテイクに、尾を引くインパクト。端正なのにパワーを感じさせる。徹底されたワンシーン・ワンカット。2時間34分をわずかに30カットで撮ったという事実がそれを証明している。といっても、同じ日常のシーンを撮りながら微妙に少しずつ撮り方を異にしている。それ故、

一見繰り返しの映像のように見えても見飽きることはない。こうして映画は、余計なものを削ぎ落として、ふたりの日常が淡々と繰り返されるのを映し出していく。湿った情緒を削ぎ落とし、ストイックなまでにシンプルに。

そんな映像に、吹き荒ぶ暴風の音と地鳴りのように響き渡る音楽が加わる。一定のフレーズが繰り返し繰り返し挿入され、果てがなないように聞こえてくる。暴風の音に音楽がかぶさり、重なり合う。そうするうち音と音楽が根源的には同じなのだとわかってくる。音は音楽で、音楽は音になる。

ミニマルな構成とミニマルなリズム。そのミニマルリズムは、つまりは反復する日常の行為と反復する音楽によって支えられている。そのことで観客の視覚と聴覚を同時に刺激する。モノクロでミニマルな映画だということは、すなわちいわゆる映画的な要素を排除することになる。だが、皮肉なことにはこの映画はそのことによってもっとも映画的になっているといえる。映画とは何かということを感じさせずにはいられない。

映画のラストでは暴風は去り、静かな孤独と終末が待ちうけている。静寂と闇に包まれて、ふたりは馬とともに死ぬしかないのかもしれない。多くの映画にありがちな安易なヒュ

ーマニズムとか、手垢にまみれた感動といったものとは無縁である。「この映画は死を宣告された私たちが感じる深い悲しみをもって人間の倫理を描く」……タル・ベーラのことはである。

しかし、この映画を観ると、タル・ベーラのことばとは裏腹に、希望とか、その逆の絶望とか、あるいは幸福とか不幸とか、そんなものを凌駕する何か絶対的なものをも感じさせる。有無を言わせぬ絶対的なもの。確固たる揺るぎない何か。それは、もしかしたらタル・ベーラの映画作りへの姿勢あるいは哲学が映画に乗り移ったことによつて表出されたものなのかもしれない。

映画を観終わったあと、淡々と繰り返されるふたりの日常が残像となり、暴風と繰り返される音楽とが残響となつていつまでも軀から離れていかない。今も思い出すたびざわざわと胸騒ぎを覚える。

『わよならくちびる』

西松 優 日本映画愛好家

2019年 ギャガ 116分

監督・脚本・原案 塩田明彦

出演 小松菜奈、門脇麦、成田凌

付き人の志摩（成田凌）がハル（門脇麦）のアパートのドアを開けると、大きなバッグが突然投げ出され冒頭から緊迫した空気が漂う。この物語は女性デュオ「ハルレオ」のハルとレオ（小松菜奈）が修復できない大きな亀裂から解散を決め、付き人の志摩と共に全国七つのライブハウスで解散ツアーを行うロードムービーで、青春映画の秀作である。

ハルとレオのツアー中の二人の揺れ動く心が主題のはずだが、正面からの描写はあまりない。塩田明彦監督は映画術を駆使し映画の中に仕掛けの細片を散りばめて、主人公たちの微妙な心の動きや行動の理由を観客の“気づき”と“想像力”に委ねようと試みている。

「省略」が効果的だ。さりげなく断片を露出させ、「伏せること」によつて観客の想像を膨らませる。例えば、ハルの苦難の人生やレオの恵まれない生い立ち、志摩の若き日の失

敗は具体的に描写されない。しかし、これによって観客の想像力は刺激され、よりリアルに共有される。それができるのは人物造形が深く、魂が吹き込まれているからだ。

また、起伏の乏しい日常の中に回想シーンが的確に挿入されている。細かな説明はないが、不幸せなハルとレオの出会い、ハル・レオ・志摩それぞれが一方通行の片恋、才能豊かなハルへのレオの嫉妬と自信喪失など二人の関係の背景を観客は自然に読み解くことができる。孤独な二人が出会い、ハルの指導でレオがメキメキ上達し自宅練習から公園・路上ライブへ踏み出していく回想は、二人の距離が縮まりお互いがなくてはならない存在と意識する場面で、数少ないホッとするシーンだ。

「積み重ね」も功を奏している。七か所のライブの様子を淡々と描写するが、二人が歌う歌が観客の心に徐々に沁み渡ってくる。劇中三曲の歌は曲調も素晴らしいが、シナリオを反映して主人公たちの心情が詞に深く刻まれているため、何度も聴くうちに「心が叫ぶの、離れたくないよ」というお互いの本心がジワジワと伝わってくる。不機嫌で話すのさえも嫌な二人の描写ばかりの中で、隠れた本音が垣間見えるのだ。

ツアー出発時大量に山積みされた販売CDが最後にわずかになっていいるさりげない描写が、言外にこの間に起きた出来事を思い出させラストの近いことを予感させる。結末は意外でもあり、もつともでもある。三人の個性派若手俳優が役柄になり切り支えているお陰で、監督はラストの解釈もまるごと観客の想像力に委ねることができた。

『三月のライオン』

保田與志彦

MuGicrate オーナー／むぎの部活動！「えいが部」部長
1993年 118分

監督 矢崎仁司

脚本 矢崎仁司、サチオ・オノ、ヒロシ・ミヤザキ

「或る日、大好きだった兄が、記憶を失った。妹は記憶が戻るまで恋人になる事に決めた」

心臓の音から始まるこの映画。その後今で言う「ASMR (Autonomous Sensory Meridian Response)」のアイスを食べる「シャキシャキ音」が続く。主人公の「アイス」は常にクーラーボックスを持ち歩く変わった女の子。兄の変わりを

探して、行きずりの男性を探し彷徨う日々。大好きだった兄がバイクの事故で記憶喪失となり、兄の恋人だと名乗り、二人の新しい生活が始まる。

「氷の季節と、花の季節に、三月がある。三月は、嵐の季節：」

タイトルの『三月のライオン』は別の将棋漫画の方が有名になっているが、この映画から影響を受けた様で、題名の由来はイギリスの諺「March comes in like a Lion, and goes out like a Lamb.」（3月はライオンのようにやって来て、子羊のように去っていく）大好きな兄を探して彷徨う氷の季節が、記憶喪失の兄と出会い嵐もあるが、晴れ晴れしい季節に変わって行く。兄を愛すという荒々しい思いがライオンであるなら、キリスト教で言う処の子羊は「犠牲」でもあるかもしれないが、「穢れのない」愛の象徴だと感じる。

私は大学生時代には「映画研究会」に属しており、映画を見るだけではなく、今ではもう現像すらできない8mmフィルムで自主映画を製作していたりしたので、この映画の色感だったり雰囲気が好きで、矢崎監督のこだわりが痛いほど伝わってくる素敵なお世界観を感じられる映画。セリフが少ないので、耐えられない方も多いかもしれないが、言葉

で表すだけが映画じゃない事を実感させてくれる。ヴェンダースやウォン・カーウアイ、小津安二郎などを感じさせる素敵な映像。

近親相姦ものは悲劇としてとらえられる事が多いが、どのような形であれ愛に間違いは無い。その感情を抑えつつ自分を否定するのも誤りであると思う。人によっては心地よいエンディングではないかもしれないが、最後のシーンが冒頭の心臓音に繋がっている作りは、エンディング以上に意味深さを漂わせる。言葉や説明が少ない故、自分の妄想が膨らむ素敵な作品。

第二土曜日の夜、桑名の古民家カフェ「Mugicafe」で「えいが部」開催しておりますので、映画好きの方、楽しく語り合いましょう。

『火口のふたり』

2019年 ファントム・フィルム

監督・脚本 荒井晴彦 115分

原作 白石一文(同名河出文庫)

出演 柄本佑、瀧内公美

女は怖い、男は馬鹿だ。

結婚を一週間後に控えた女が、昔の男に会いに来る。女は新しい生活を始めるにあたって、体が覚えている元カレと、もう一度やるだけやって過去をリセットしたかったのだ。男は、何故、女が結婚間近になって会いに来たのかよくわからない。しかし、女に誘われて一旦肉体関係を取り戻すと彼の性欲に火が点く。それからというものは……荒井晴彦久々のポルノ脚本・監督作品。

オイラはこの映画を観て、突然昔のある出来事を思い出した。それは、むかしむかし20代で会社の独身寮に入っていた頃の話だ。寮は3階建て、寮生30〜40人ぐらいと賄いの女性4〜5人が生活を共にしていた。



そんなある夜、突然一人の女が寝ている2階のオイラの部屋へ入って来たのだ。何と賄いのA子じゃないか！どうやら人の心配がないのを見計らって、大胆不敵、寮生の通る廊下を走り抜けてきたようだ。聞けば近々結婚するという。だからどうしたと聞くと、とにかく部屋へ来たかったというのだ。結婚前の特にまじめな女ほど、やり残したことがある……

遊び足らなかつた……私の青春これでよかつたのか……とか、迷いが出て来て、突然、突飛な行動に出ることがあると聞いてはいたが、正直びっくりする。

で、こういう気持ちは素直に受けないといけない。話しているうちに、オイラの下半身が放っておかない、なるようになっていくわけであるが、まだ20歳前後の小娘と思っていたら、大間違いでしつかり相手の男とエクササイズしていたらしく、その激しさに圧倒されたのである。相手の男は女が他の男とそんなことをやっているなど露知らず、だから男は馬鹿だ。シチュエーションこそ違うが、この映画の直子とその時のA子の行動が重なり合うのだ。

荒井晴彦的「性的人間」の集大成

脚本家の荒井晴彦はオイラの好きなライターだ。彼の作品は一貫して性を取り上げてきている。映画が人間を描く以上切り離せないという。オイラも全く同感だ。

日活ロマンポルノ時代に映画関係者が片手間に書いた脚本と違って、荒井の脚本は日常がしつかり描かれている。

登場人物は男賢治（柄本佑）と女直子（瀧内公美）の2人だけ、という大胆な構成。2人は女の挙式前になって、やけ

ぼっくりに火がつく。

直子たち新婚夫婦が入る予定の海沿いの一軒家で2人はやりまくり喰いまくる。荒井がト書きで細かくセックスの体位を書いているので、迫力のあるショットが次々と現れる。（彼はどうやらバックが好きらしい）また、金子マリの挿入歌が素晴らしい。滑稽だが切ない2人の挙動に見事にシンクロしている。

主役の柄本佑と瀧内公美の2人は素晴らしい。最近のプロダクションの力が強く、役者は思うように動けないと聞く。しかし、この2人に限ってそんな障壁は感じられない。瀧内がいさぎよい。全部見せる。スリムで躍動する躰は圧巻。行為中のオタケビもエロい。柄本の茫洋とした振る舞いは、「ポルノは女優の専売特許じゃないよ、1人じゃできないよ」と、相変わらずの存在感を見せる。

日活のロマンポルノが始まって半世紀が経つ。しかし本作品、どんないやらしい絡みを見せても、神代辰巳を代表する当時のような退廃的で淫靡な匂いはしない。性を突き抜けて、生きて行こうとする人間の底力が感じられる。荒井晴彦的「性的人間」の集大成と見た。